

Q&Aで検証 新国立競技場 迷走の2年



解体される前の国立競技場。2014年1月、東京都港区で、本社リポーターから

司令塔不在



2015年7月30日、白紙撤回を受け新たな提言をする。横濱から東京都港区で

Q 計画作りオープンだった?

A 一連の経緯では、情報公開に後ろ向きなJSCの姿勢も浮き彫りになった。2012年3～11月、計画の立案からデザイン選定まで重要な議論を行った第1回～第3回の有識者会議は非公開。議事録は現在も公表されていない。

本紙が情報公開請求で入手した議事録は、一部が黒塗りされていた上、英国在住の建築家ザハ・ハテイド氏のデザインを批判した森喜朗元首相らの発言が削除されていた。

象徴的なのは、2520億円の工費を了承した今年7月の有識者会議。会見に100人以上の記者が詰め掛けたが、JSC側は「会場の貸し切り時間が30分で打ち切った。ほとんどの記者は質問もできないまま。記者団が再説明を要求し、約3時間後に設定されたが、その場で初めてJSC幹部が認めたのが、1万5000席の可動席の費用が2520億円に含まれていないという重要な情報。JSC側は2520億円を「総工費」と説明していたが、総工費ではなかった。

Q なぜ豪華施設に?

A 新国立競技場をどんなスタジアムにするか。2012年3月に開かれた有識者会議の初会合での配布資料には、「求められる要件」として「規模は8万人がスタートライン」「全天候型スタジアム」とある。全天候型とは開閉式屋根のこと。後に「豪華すぎる」と批判される材料は、出発点から織り込み済みだった。JSCの斎藤氏は「開閉式屋根の設置はJSCの提案」と明かす。

参考の一つにしたのが英国のウェンブリー・スタジアム。「サッカーの聖地」と呼ばれるこのスタジアムは9万人収容、開閉式屋根を備え、スポーツにもイベントにも活用される。

その後の有識者会議などでは「全部積み上げるのは不可能」といさめる声が出るほど、スポーツ界、興行界などから設備要望が相次いだ。JSCは「世界一のスタジアムを目指す」としてJSCは整理せず128項目全てを取り込んだ。

結果、延べ床面積29万平方メートル(後に22万平方メートル)と、ウェンブリーをも圧倒する五輪史上最大の巨大ドーム構想になった。

Q 改修案なぜ消えた?

旧国立競技場を大改修して収容人数を約五万人から七万人に拡大する。

新国立競技場建設の事業主体となった日本スポーツ振興センター(JSC)が2011年3月、大手設計会社から報告を受けた旧国立の改修案は、こんな内容だった。

工費は税抜き七百七十七億円。今なら魅力的な案に思えるが、JSCの斎藤孝博国立競技場長は「改修案を見て、こんなに使い勝手が悪いのかと驚いた」と振り返る。

旧国立は一九五八年完成。老朽化して各設備が国際基準に合致せず、耐震診断で国の基準を満たさないことも分かった。改修案は、こうした欠点を部分的に補う内容だったが、抜本的な改善のためには敷地を拡大する必要を感じたという。

一九九七年ラグビー・ワールドカップ(W杯)に向けて八万人規模にしようにも、改修は難しい。関係者の腹は固まっていたが、誰がどこで最終的な判断を下したかはっきりしない。斎藤氏は「流れの中で決まっていた」と指摘。文部科学省幹部は、ラグビーW杯や、五輪招致に成功した場合に向け「走りたさなければいけなかった」と話す。

文科省は一年九月、二年度予算の概算要求で「国立競技場の改修に向けた調査費」一億円を計上。同幹部は「建前上は、改修の選択肢も残しつつ調査することだったが、内々では建て替える意志は固まっていた」とも明かす。

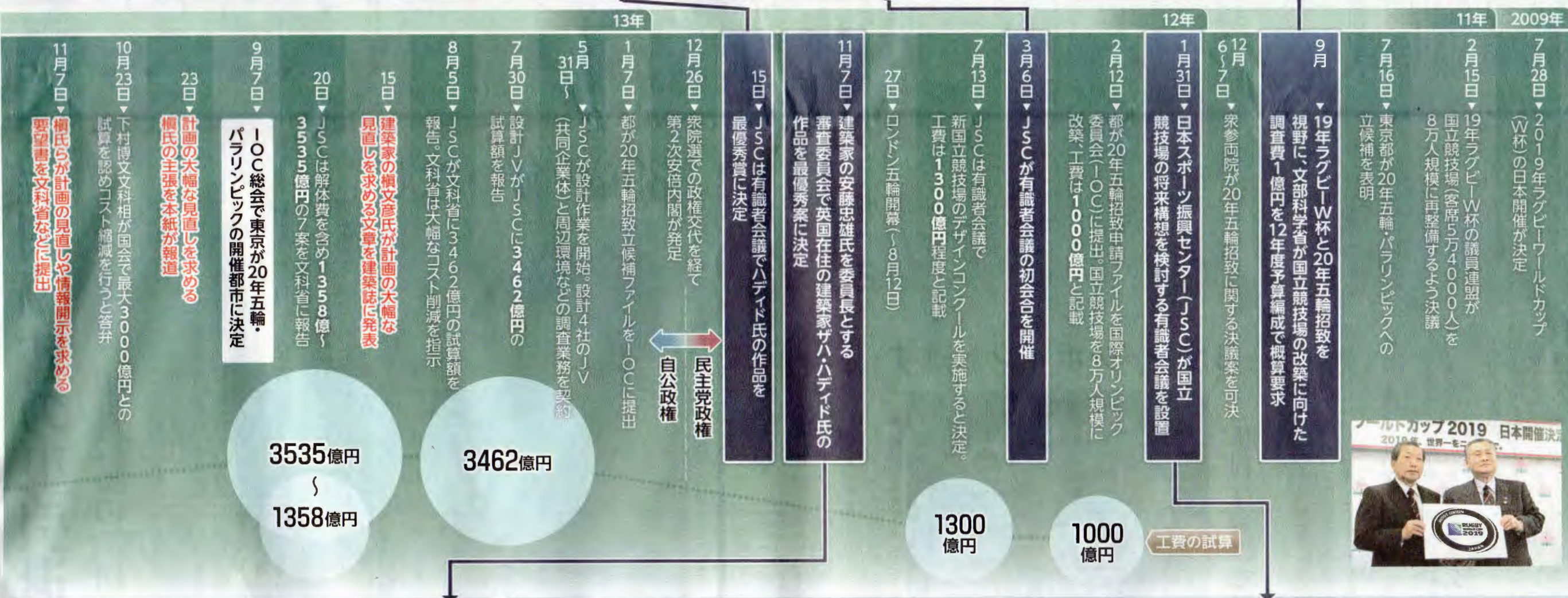
その後JSCが設置した有識者会議の設置要項は「国立競技場の将来構想について審議する」と、建て替えに含みを持たせていた。

A 「8万人収容」ありき

2011年9月、二年度予算の概算要求で「国立競技場の改修に向けた調査費」一億円を計上。同幹部は「建前上は、改修の選択肢も残しつつ調査することだったが、内々では建て替える意志は固まっていた」とも明かす。

その後JSCが設置した有識者会議の設置要項は「国立競技場の将来構想について審議する」と、建て替えに含みを持たせていた。

新国立競技場をめぐる動き



※赤字は外部の指摘

Q JSCって何?

JSCは文科省所管の独立行政法人。かつて旧文部省の天下り先として、幹部OBが理事長を歴任。今は役員七人のうち一人が文科省から出している。

歴史をひもとくと、学校給食用に小麦や脱脂粉乳などの食材を卸す「日本学校給食会」(一九五五年設立)、旧国立競技場の運営を担う「国立競技場(五八年設立)、学校での災害共済給付事業を扱う「日本学校安全会」(六〇年設立)という二つの特殊法人。行政改革でこれらが統合されていき、八六年に「日本体育・学校健康センター」が発足。二〇〇三年、JSCに衣替えした。

組織の性格が一変したのは、スポーツ振興(じ)とtotto(とと)事業を担ったこと。〇二年度から収益の一部を競技団体に助成する立場になり、大きな力と権限を握った。

スポーツ行政に詳しい森川貞夫・日本大名誉教授は、JSCにtottoを担った背景について「文科省が自分たちの天下り先を太らせるため」と指摘する。

〇六年に当せん金最高六億円の「BIG(ビッグ)」が発売され、tottoの収入は拡大。JSCの四年度予算は一九八年度の二・五倍、スポーツ振興への助成額は過去最高の二百七十七億円に上った。「競技団体はますますJSCにすり寄るようになり、モノが言えなくなった」と森川氏。

半面、JSCは大規模事業を扱った経験が乏しい。ノウハウを持たないまま新国立の事業主となったことが、迷走の一因になった。

A tottoで強い権限

〇六年に当せん金最高六億円の「BIG(ビッグ)」が発売され、tottoの収入は拡大。JSCの四年度予算は一九八年度の二・五倍、スポーツ振興への助成額は過去最高の二百七十七億円に上った。「競技団体はますますJSCにすり寄るようになり、モノが言えなくなった」と森川氏。

半面、JSCは大規模事業を扱った経験が乏しい。ノウハウを持たないまま新国立の事業主となったことが、迷走の一因になった。

Q なぜハテイド氏案に?

二〇一二年に行われたデザインコンクールは、公募開始から審査を経て受賞決定まで約四月。この規模の事業としては異例の「超短期決戦」だった。五輪の招致申請ファイル提出が目前に迫っていたため。

審査委員会による審査では、建築家ザハ・ハテイド氏の作品を含めて三つの評価が拮抗。ハテイド氏の案はダイナミックなデザインが評価される半面、構造の複雑さに対して懸念する声も出た。議論は平行線をたどり、最後は安藤忠雄審査委員長が「日本の

A 懸念の中「拙速審査」

技術力を世界に示せる」との理由で、ハテイド氏の案を最優秀案に選んだ。

こうした駆け足の選考過程に、審査員には不満も残った。審査員の内藤廣東大名誉教授は「審査は拙速だった」と言われても仕方ない。計画に反対してきた建築家は昨春ある審査員から「この計画は間違っている」と声をかけられたという。

建築家は「いろんな問題をやらせていることを、審査員だからよく分かっていたのだ」と話す。



2013年3月、デザインコンクール最優秀賞を受賞し、笑顔を見せるザハ・ハテイド氏(右)。左は審査委員長の安藤忠雄氏

